

タ リ タ ・ ク ム

# “Talitha, koum”

「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第 2 号

2005年8月15日

発行人: 吉谷かおる

「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」 マルコ3:34 - 35

松原恵美子 (大阪教区)

先日、中村勘三郎襲名披露公演を観た。2人の息子さんをはじめ若手の歌舞伎役者もたくさん出演されていた。歌舞伎役者などその家に生まれたことによって、乱暴な言い方だが、職業選択の自由のない世界が日本にはまだまだある。また、女性には選択できない世界もまだある。歌舞伎や歌舞伎役者が出演する舞台を見終わると、いつも同じことを思ってしまう。彼らには葛藤はなかったのだろうか、またその家に生まれた女の子はどうなのだろう、妻の立場は、などと「家」制度の呪縛みたいなものを考えてしまう。

私の仕事は教師なので、教育基本法の改正(改悪)であるとか、教科書問題については、ここ数年ずっとこわい思いをしながら情報収集をしたり、講演会を聞きに行くなどそれなりに勉強してきた。また、YWCAなどの活動を通して、憲法9条のことについても、もちろん考えてきた。しかし、

実は憲法 24 条については気がついていなかった。しかし、24 条を改変するということは、すべてにつながっていく。そうか、9 条と 24 条はこう関連していたのか、「つくる会」はだから「家庭」にこだわっていたのか。なんて恐ろしい世の中になってしまうのか。(子どもと教科書全国ネット 21 などの情報を参考にしてください)

教会では、政治のことは触れないようにしましょう、という風潮があるかもしれない。家族、家庭についての考え方も教会的だと思う。たとえば、「クリスチャンホームをつくりましょう」とか、ジェンダーの視点で考えると、とんでもないことをよく耳にする。以前、NCC Y 関西で行っていた女性分科会という学習会で「家庭内伝道」という言葉がはやったことがあり、否定的な意味のギャグで使われていたことがあった。信仰は個人のものでしょうか。影響されてキリスト者になるのはわかるが、お仕着

せはどうよということで。

私たちは聖餐式で「主の平和」と挨拶をする。聖書の中にも「平和」という言葉は、あちこちに出てくる。「でも、教会は憲法を語るところじゃないし、靖国とか難しい問題ですね。」などと言っている間に、あらあらという世の中になりはしないだろうか。

ジェンダーの視点で考えると、今の世の中の恐ろしさに気づかされることがたくさ

んある。あきらめず、取り組めるところからやらなければ…。

おすすめ本

『憲法 24 条 + 9 条 なぜ男女平等がねられるのか』中里見 博著 かもがわブックレット

『やさしいことばで日本国憲法』 マガジンハウス

## …分かるように言ってください…

そして私たちにもすぐわかるように

京都教区主教 高地 敬

いますが、それでもいわゆる「女性としての役割」を妻に押し付けているのだと思います。

ただ少しでも改善したいと思っています。集まりのときには男性が率先してお茶を入れる。それに対して女性は「そんなことしないでください」とは言わない。そんな意識が少しでも広まればと思います。

「福音の土着化」ということがずいぶん前から言われています。そこで出てくる議論は、日本人の感性にあった福音理解についてであることが多く、日本に住むどの人たちに福音を伝えるかということがほとんど言われてこなかったのではないかと思います。「福音が土着する」とは、かなりの人数が福音を受け入れ、それと結びついた生活をするのだとすると、「土着化」とは、語弊があるかも知れませんが、「大衆化」のことだと思います。

「ジェンダープロジェクトって何？アジアの人たちの借金返すっていう、あれ？」

「そら、ジュビリーや」

あいかわらず間の抜けた会話しかしてませんが、このカタカナの言葉がやっぱり分かりにくいのかもかもしれません。ジュビリーとジェンダーと両方の説明を思いつくままにして、その上で、お茶は誰が入れるかという話になります。

日本で今でもよく見かけることですが、何かの集まりでお茶を入れている人はほとんど女性です。男性は座ったままで、中にはお茶が出されても、頭を下げることをしない人がいます。あそこまではいかなくても、自分も男性として、同じような感性でいるのかなと思うとぞっとします。うちがかなりの部分がセルフサービスになって

同じようにジェンダーにまつわる問題意識が日本の中に根付いていくには、「大衆化」が必要なのではないかと思うのです。そのためには、日本の伝統的なキリスト教がしてきたようなとっつきの悪い言葉遣いをしないことがまず必要なのではないでしょ

うか。そして私たちにもすぐにわかるように、カタカナや横文字や漢語を多用しないで書き、話す。

「ジェンダー」はどうしても訳せませんか？

第 49 回国連女性の地位委員会・ IAWN のプログラムに参加して  
大岡左代子 (京都教区)

東京教区の山野繁子司祭と私は、今年の2月23日～3月10日まで、聖公会国連事務所(Anglican United Nations Office)からの呼びかけにより、日本聖公会から派遣されて、ニューヨーク国連本部で開催された第49回国連女性の地位委員会とACC(聖公会中央協議会)が主催するIAWN(国際聖公会女性ネットワーク)のプログラムに参加しました。もう半年も前のことになります。2月～3月のニューヨークは、まだ時折雪が降る厳寒期。初めて訪れる土地、初めて経験する世界の聖公会女性との出会いは私にとって貴重な体験となりました。

「北京+10」として開かれた今回の国連女性の地位委員会(CSW)は165カ国から1800人以上の政府代表と3000人近いNGOが参加しました。私たちもACC(聖公会中央協議会)から派遣されたNGOとしての位置づけでの参加でした。

国連は、過去に4回の「世界女性会議」を開いてきました。1975年メキシコシティ(メキシコ)1980年コペンハーゲン(オラン

ダ)1985年ナイロビ(ケニア)1995年北京(中国)です。メキシコでの会議は、史上初の「世界女性会議」でした。そこでは、「世界行動計画」が策定され「平等・開発・平和」が目標に掲げられました。ナイロビでの会議では「ナイロビ将来戦略」が採択され、北京ではナイロビからの10年を総括して「北京行動綱領」が採択されました。「北京行動綱領」は女性の課題を「貧困」「教育」「健康」「暴力」「武力衝突」「経済」「権力と意思決定」「制度上のしくみ」「人権」「メディア」「環境」「少女と子ども」という12の項目から捉えたもので、つくられた背景には、1979年に国連で採択された「女性差別撤廃条約」がありました。日本はこの条約に1985年に批准しましたが、それはちょうどケニアのナイロビで「第3回世界女性会議」が開かれた年でした。今回の第49回国連女性の地位委員会においては、メキシコからの30年間の女性の地位向上についての歩みが検証され、世界の代表たちは「北京行動綱領」の完全実施に向けて行動すること

を再確認する宣言を採択しました。そして、それは「女性差別撤廃条約」を具体化するための戦略目標であるとし、あらためてその重要性が語られたのでした。

私たちはその会議を傍聴したり、会議場の外で各国の NGO が開くサイドイベントに参加し、女性に関する様々な課題について思いを共有する経験をしました。

一方、CSW と並行して行われた聖公会の集まりでは 27 管区より 41 名の女性の代表者が集まり、「北京行動綱領」の 12 項目に関するアンケート結果を参考に、小グループや地域別の討論を行い、女性が直面している緊急課題として「貧困」「教育」「暴力」「良質で安価な保健施策の欠如」に注目。そしてこれらの課題を克服していくために、世界に広がる聖公会女性たちが今後も繋がっていくことを確認しあい、聖公会の代表としての閉会声明を採択しました。それは、聖公会のあらゆる場所で意思決定機関の全てに女性が少なくとも 30% は含まれるようにということを含んだものとなりました。

また、3月6日日曜日の午後、アメリカ聖公会の Women's Empowerment Team が主催する「世界を修復する～行動に見る聖公会女性たちの信仰」と題したパネルディスカッションが主教座聖堂にある会議場で行われました。私たち各管区からの代表者と男性も含む多くの米国聖公会の参加者などで会場は溢れ、基調講演を含む五人の女性の発言を聞きましたが、パネラーとなった一人ひとりの女性が、女性としての課題を負いつつ希望を失わずに歩んできた信仰の道

は、そこに参加した私たちを力強く励ましてくれました。特にフィジーでの初めての女性司祭で、国連への政府代表の一人でもあったセレイマさんの言葉、「何ができるかを問うことはやめました。何ができるかではなく、応答する態勢にあるかを考えるようになりました。」は、私自身を振り返るきっかけとなりました。

今回の会議への派遣が正式に決まったのは1月半ばのことでした。多くの人に助けてもらいながらできない英語と格闘し、短い期間に読んだ国連の女性の地位に関する取り組みや聖公会としての女性の地位に関する文書は日本聖公会の女性の間では殆んど話題に上がらないものでした。(英国を中心とする日本の婦人会のような団体であるマザーズ・ユニオンは、その活動方針に「北京行動綱領」への取り組みを明記しています。)私自身、文書を読んだだけでは理解できなかったことも多く、会議に参加し世界各国の人と交わることで理解を深めていくことができました。また、自分とは全く縁遠い・・・と感じていた国連の働きが、私たちの生活のいろいろな場面で関係していることも知ることができました。私自身が、かつて妊娠を理由に職場を去らなければならなかったのは 1984 年のことだったなあ～、と思いつく時、日本はまだ「女子差別撤廃条約」に批准していなかったのだ・・・と、自分自身の体験に結びつくこともありました。思いもかけない貴重な体験をした今思うことは、一人ひとりの女性の体験と私たちの経験がどこで結びつき、共に課題

の克服に力をあわせていくことができるのか・・・ということです。また、一人ひとりの信仰の見地からこれらのことをどのように考え、行動していくのかということではないかと思えます。私が体験したことは私の経験ですが、それぞれの体験を語り合い、共感する体験を重ねていくことはとて

も大切なことではないかと思えます。女性に関する課題の克服は女性だけが恩恵を受けるのではなく、すべての人がよりよく生きるために必要なプロセスであるということを確認し、希望をもって少しずつ進んでいきたいと思えます。

### ジェンダー—口メモ 「ジェンダー・バイアス」とは???

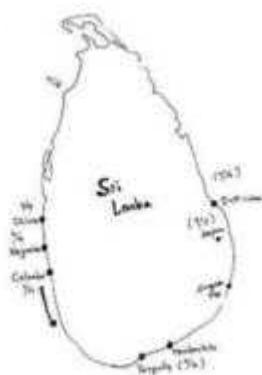
「ジェンダー」だけでもわかりにくいのに、「ジェンダー・フリー」とか、「ジェンダー・センシティブ」とか、この頃はへんなカタカナ語がいっぱい出てきていやだなあ、もっとわかりやすい日本語で言えないの？ そう思われる方も多いのでは。確かに、ジェンダー論の分野でも、より適切な表現をさぐっていく必要がありますね。と、言いながら、面倒な話になったらごめんなさい。今回は、比較的定着している用語「ジェンダー・バイアス」について考えてみます。「男女の違い」についての考え方には、大まかにいって二つの立場があります。一つは、「人間の本質的な特性であり、自然であり、変えられないもの」だとする立場(本質主義)、もう一つは「社会的/文化的につくられたもので、絶対的でも普遍的でもない」とする立場(構築主義)です。たとえば職業適性に関して、身体の違いや生まれつきの特性が強調されることがありますが、そのような「性別特性論」が依拠しているのが前者の本質主義的視点です。それに対して、後者の立場が「ジェンダーの視点」ということになります。「バイアス」というのは「偏り/偏見/非対称性」のことですから、「ジェンダー・バイアス」は「性別による偏り」、「男女という固定的な決めつけによる偏見」と言い換えられます。ジェンダーの視点から見たとき、社会制度や慣行がすでにこの「偏り」に根ざしていることに気づかされます。男女間の賃金格差をはじめとして、女なのに食堂で大盛りを頼んだら恥ずかしい、パソコンに弱いのは女だから仕方がない、リーダーは男性にやらしてもらおう、男が育児休暇をとるなんて、などと思うことも「偏り」に含まれるでしょう。「女は地図が読めない、男は人の話を聞かない」みたいな二分法的決めつけは一般に好まれているらしいですが、まさか皆がみなこれに当てはまるわけではない。男は泣くもんじゃないよとか、女は甘いものが好きだとか、簡単に言ったり言われたりしますが、ホントに？と疑いの目を向けてみてもいいのではないのでしょうか。(吉谷かおる)

## スリランカ視察に参加して

木川田道子（京都教区）

私は、7月13日～20日、CCA(The Christian Conference of Asia)主催の津波被害の現状を知り援助のあり方を考えるスリランカへの視察に、日本聖公会管区代表の一人として参加しました。

現地へ深夜に着いた翌朝から早速ミーティングが始まり、死者、行方不明者4万人以上、そして現在も27万人が失職状態という甚大な被害を出したこの国の今の課題を、視察団のメンバー（12人、うち日本から4人）やCCAスリランカ、各教会関係者、YMCA、ボランティア組織の方々などを交えながら話し合いました。緊急援助期は過ぎたとは言え、まだほとんどの人が仮設住宅に住み、仕事、食糧、住まい、生活全般、町づくり、教育、親を失った子ども、内戦の影響、防災対策と言ったたくさんの課題があるようでした。しかし、この時の英語の会議では、たくさん問題があると聞かされたものの、私はあまりピンと来ず、今回の視察が、どんなに重い旅になるかは想像もついていませんでした。



翌日からのコロンボから海岸沿いに南下

して国の北東部へ北上する3泊4日の旅と、後日に行ったコロンボ北部への視察は合わせてスリランカ半周にも及ぼうかというものでした。被害を受けた沿岸の町村で共通して出ている問題は、被災者の6割が漁業関係者だということに、仕事をしようにも船や網が流されて仕事ができない、ということと、政府が復興計画の中で打ち出してきた、沿岸の波打ち際から100メートルを災害の時のための無人緩衝地帯にするという計画への不満でした。この政府案は一見、人命を考えている策のようですが、住民に何の相談もなく政府が勝手に決めてしまった、ということと、一部政党の利権がらみという報道もあって、政府のやり方はおかしい、自分たちの土地をどうしてくれるんだ、コミュニティの再生をどうするんだ、という話をあちこちで聞かされました。沿岸を北東部へ進むにつれて出てきた問題は、分離独立派(LTTE「タミール・イーラム解放の虎」)の支配地域に近づくにつれ、津波救援が充分に行われていない、ということかつての内戦がまだ多くの人々の暮らしに影を落としている、ということでした。20年前にレイプされかかった女性を助けようとして政府軍から両手を切断された男性はあれから何も変わっていないと憤っていました。政府軍にLTTEと誤射されて負傷し、足の手術を繰り返す少年にも出会いました。そんなところへも津波は容赦なく押し寄せました。政府は3年前にLTTEと停戦合意し、最近も協力して復興にあたる、

ということになったと聞きましたが、この分離独立派への強硬な反対政党があって、各国からの義援金の分配も行われていないということでした。(この原稿の仕上げをしている今、8月12日、スリランカの外相が暗殺されたという報道がありました。これでまた、事態はより混乱し、悪い方へいくのではないかと心配です。)

災害弱者である女性や子どもの問題も切実でした。家が軒並み流されて土台ばかりが目についたハンバントタというモスリムの港町で、あるテントを訪れると家族を失った女性がひとりでコーランを読んで祈っていました。男性たちは祈りの時間ともなると集会所へと集まってきていましたが、女性はそうもできないようでした。彼女のテントの中には家財道具といったものは何ひとつ見当たりませんでした。女性が外へ出ていくことは喜ばれないモスリムの世界で彼女はひとり、これからどう生きていくのだろう、と日本に帰ってからも気になりました。3日目に行ったヒンズーの村では、子どもを津波で亡くした夫婦がつい最近自殺を図り一人は助かり病院にいるが一人は亡くなった、だからこの家は今空っぽなのだという説明を聞きました。津波後の自殺者が後を絶たないと言われていました。時間は人を癒すのではなくますます悲しみを深くしているようでした。また、観光開発が進む地域では、津波前からベドフィリア(幼児、小児を性的欲求の対象とする行為)や子どもポルノが問題となっていました。津波後もお金に困った親が子どもを観光客



相手に売る、というケースがあるということでした。低年齢児や男の子は妊娠しないということで高い料金がつくという話はショックでしたが、「日本人も来ていますよ。」と言われて言葉もありませんでした。

この視察に同行した南インドの NPO の人に “democratic tourism” という言葉を教えてもらいました。「搾取」ではない環境・人権を守る民主的なツーリズムという考えがどこの国でも当たり前のことにならなければならない、と思いました。

多くの場面で、私はビジターに過ぎず、「そうだったんですか。」「本当に大変だったですね。」ということで数分で立ち去っていく、ということしかできないことを辛く感じました。いったい私たちは日本人として、相手を尊重しながら、対等に、どういう方法で、彼女ら彼らの自立を援助することができるのでしょうか。立ち足はだかる問題の多さに考え込むばかりですが、一方で、宗教が違っててもコミュニティの復興に協働して取り組む人たちや、子ども、障がいを持つ子ども、女性の問題に取り組む多くのスリランカの人にも出会うことができました。相手の顔が見えたことは具体的な策が浮かぶ第1歩かと思います。何ができるのか、もう少し考えてみたいと思います。

♪      ♪      ♪ Book Review 02

評者：吉谷かおる

角田光代『対岸の彼女』(文藝春秋 1,600円+税)

新津きよみ『スパイラル・エイジ』(講談社 1,500円+税)

負け犬ブーム、その後…。酒井順子さんの対談集『先達のご意見 負け犬他流試合』(文藝春秋、1,238円+税)を読みました。先達の顔ぶれは、阿川佐和子、内田春菊、小倉千加子、鹿島茂、上坂冬子、瀬戸内寂聴、田辺聖子、林真理子、坂東眞砂子、香山リカの10人です。酒井順子さんが相変わらず「自分が結婚したいのか、したくないのかよくわからない」とあやふやなことを言っているのに対し、ゲストには迷いを超越した方が多いせいか、なんだか嘔み合わない印象でした。結局、この本に限らず、誰でも自分の境遇に基づいて発言するのだから、結婚している人は「大丈夫、あなたも結婚できるわよ」と言ったりして、自分のしていることを奨励しがちなのでしょうか。

角田光代さんの第132回直木賞受賞作『対岸の彼女』の腰巻の文章をそのまま引用してみます。「女の人を区別するのは女の人だ。既婚と未婚、働く女と家事をする女、子のいる女といない女、立場が違うということは、ときに女同士を決裂させる。」なるほど、それは言える。タイトルも上手い、「彼女」が『対岸』にいるように感じる気持ちは、たいていのひとが味わうものだから。というわけで、恋愛ものを書く人なのだろうという先入観があったため(私は恋愛ものと

SFは受けつけない)少し出遅れましたが、この作品を読んでみました。結論からいうと大当たりでした。三歳児をもつ専業主婦の小夜子は、働きに出ようと思い立ち、求人誌で見つけた旅行代理店の社長、葵の面接を受け採用されます。実は仕事の内容は、新規事業として企画された掃除の代行業でした。働き始めた小夜子の奮戦ぶりと、葵の10代の頃の出来事が交互に語られ、甘くない物語が織り上げられていきます。同世代ながら会社の経営者とパートの主婦という、まるで向こう岸にいるような相手とのあいだに、生まれそうで生まれない共感。このままふたりの距離は縮まないのか？母親同士のつきあいにも溶け込めず、屈託していた小夜子が自立していく過程も読みどころですが、気ままに生きているように見える葵の、高校生時代に起こした女友達との家出のエピソードが、私には重く胸に残りました。

もう一冊、これは、ジャンル分けでは「心理サスペンス」ということになるようですが、女同士に生まれた奇妙な連帯感を描く小説『スパイラル・エイジ』を紹介します。主人公の美樹は、30代後半の薬剤師で、不倫相手と別れたところ。自力で購入したマンションに、巨大な金魚と住んでいました

が、ひょんなことから高校時代の友人、雪乃を匿うことになってしまいます。というのは人を殺してきたばかりだと言う雪乃を放り出せず、一晩だけ泊めるつもりが、妊娠が判明したことから、さして親しくもなかった相手なのに、行き掛かり上ずると同居を許すことになったのです。そこに不倫相手の妻が介入、雪乃のおなかはどうど大きくなくなっていき、主人公の姉、不倫相手の妻の義母、義妹までもが絡み、事態はどんどん意外な方向に進展していきます。それぞれに問題を抱える女性登場人物たちの描写が秀逸で、負の感情が掛け合わされていった先に、不思議な結末が用意されています。同じ立場(同じ岸)にいる人とならばわかりあえるのかといえそうです。

共感のきっかけは、まったく思いがけないところにあるのかもしれませんが。

だいたい私は女同士の友情ものに非常に弱い。これは苦手ということではなく、なにか心の弱い部分が刺激されるのか、すぐに涙や鼻水が出るという意味です。女性同士の絆に、男の人に対するのとは違う期待感を持っているからなのかもしれません。同好の士のために、あと二冊、アメリカの小説を挙げておきます。いずれも映画化されています。

ファニー・フラッグ『フライド・グリーン・トマト』  
(二見書房)

レベッカ・ウェルズ『ヤァヤァ・シスターズの聖なる秘密』(早川書房)

## ジェンダープロジェクトからのお知らせ

2年前に箱根で行われた『プレ・聖公会女性会議報告書～今、女性の視点から21世紀の福音宣教を!』の残部がまだあります。「マルタの祈り」「ジェンダーって何?」「教会ジェンダーチェック」や「女の一生」コント集などを掲載しています。“使える”内容になっていますので、ぜひまだの方、ご覧になってください。請求先は下記まで。

この『タリタ・クム』は各教会や以前プレ会議に参加された方々などに送付していますが、なるべく多くの方にお届けしたいと考えています。自主的にまわりの方に配ってくださるのも大歓迎です。「増し刷りしたいので元原稿が欲しい。」という方はご連絡ください。

切手カンパのお願い...いろんな方に『タリタ・クム』を送りたいと思います。お家で眠っている未使用の切手をもしご寄付いただけるようでしたらどうぞよろしく!

(いずれも連絡先は 木川田道子)

**速報** 本会議開催日時決定! \*ぜひ今からご予約にいられてください  
日時 2006年8月16日(水)~19日(土)  
ところ 箱根スコレプラザホテル

正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトは、教会におけるジェンダー問題の共有と女性たちの新しいネットワークづくりのために、機関紙として、ニュースレター『タリタ・クム』を発行しています。(年3～4回発行予定) 女性の方々はもちろん、ひとりでも多くの皆様にこのニュースレターを読んでいただけたら幸いです。よりよい紙面にしていくために、皆様のご意見や感想をお待ちしています。次号では女性会議についての詳しいご案内ができると思いますので、楽しみに!

## メーリングリスト「gender-net21」に、ぜひご参加ください

ジェンダープロジェクト主催のメーリングリスト「gender-net21」(日本聖公会ジェンダーネット 21)が開設されました。私たち、聖公会につながる女性たちが、今いる場所を超えて自由にネットワークできる場として積極的に皆さまにご活用いただけることを願っています。特にこちらからは、2006年夏に開催予定の女性会議に関する情報やご案内を送る他、出前ワークショップの予定など私たちの活動について皆さまにお知らせしていきたいと思っています。また皆さまからのサポートが必要なとき、呼びかけをさせていただきたいと思いますので、「こういう部分でなら手伝えるよ」「こういう特技(?)があります」と皆様からも

アピールしていただければうれしいです。またこのニュースレターのご感想や、各教区での女性のエンパワメントにつながる企画の案内やレポートなど、さまざまな情報やご意見をお待ちしています。

### \*お申し込み先

折り返し、free ml(フリーメーリングリスト)というところから招待メールが届きますので、所定のアドレスにアクセスしてください。申し込んでくださったのに1週間経っても返事のない時は恐れ入りますが、ご連絡ください。

メーリングリスト担当

木川田道子

## 「タリタ・クム」について

「タリタ・クム」というのは、「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイ口の願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとってイエスさまが言われた言葉です。(マルコ5:41) 今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかった女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神様の祝福によって主の栄光をあらわすためにより生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。(三木メイ)